

8月7日、五能線に乗って、五所川原の立佞武多を見に行きました。

「リゾートしらかみ」(五能線)に乗って

8月7日、五能線に乗って、五所川原の立佞武多を見に行きました。

五能線の電車は、「リゾートしらかみ」で、乗車したのは秋田駅→五所川原駅まで、約3時間30分の旅でした。リゾートしらかみは特別列車ですが、520円を払うと、青春18切符でも乗れます。景色を見たり、新聞を読んだり、寝たりと至福の時間でした。

五能線は、東能代→鱒ヶ沢間は、国道と平行して、日本海に沿って走ります。日本海の海岸線は、三陸のリアス式海岸と違って、ほとんど直線です。トンネルもほとんどありません。

五所川原の立佞武多(たちねぶた)

ねぶたは青森県の祭り。青森のねぶた、弘前のねぶたが有名ですが、観光化されてなくて素朴な、五所川原の立佞武多、一見の価値があります。

「青森県を代表する夏の祭典「ネプタ」の一角をなす「立佞武多」。この巨大なネプタが五所川原の記録に登場するのは、明治40年頃。「立佞武多」という名称は、平成8年、復元に携わった市の有志たちによって命名されたものだ。

五所川原市は主に北に金木(かねぎ、太宰治の故郷)、中里の木材資源、西に鱒ヶ沢、深浦の水産資源などの中継地点の商人の町として栄えてきた。巨大ネプタは、それら豪商、大地主の力の象徴として高さを誇るようになり、ゆうに10~12間(約18~21.6m)に及ぶようになった。その勇士は、隣の金木町からも見えたというほど巨大。題材は三国志や歌舞伎など、中国や日本の歴史上の武者が多かったといわれている。

もつけ 祭り人たち

「ヤッテマレ」の掛け声は、昔、他町会のネプタを壊していた風習(喧嘩ネプタ)の名残り。「壊してしまえ!」と、叫んでいる。

彼らは、実に「もつけ」(祭り馬鹿)である。日本各地にその手の人間はいるものだが、五所川原の「もつけ」も体の芯から夏の饗宴を楽しむ祭り人だ。祭りの数日にすべてを注ぎ込むかのように騒ぎまくる。そう、文字通り「血がじゃわめぐ(津軽弁で騒ぐ)」のだ。

一心不乱に踊りや囃子に没頭する。彼らのパフォーマンスもまた、祭りの一部となる。

- *踊り手 平成10年から新しい踊りが考案され、立佞武多を先導している。
- *囃子方 一般には、桶作りの大太鼓に中小の担ぎ太鼓、横笛、手振鉦で構成される。
- *化け人 化人(バケト)は、大正末期に大流行したとされる。女装や歌舞伎など、題材は多彩。定義はコスプレ(リオの安倍首相)でないこと。
- *曳き手 重量19tの立佞武多は通りをいかに安全に、スムーズに運行するかが最重要。
- *跳人(ハネト) 五所川原市は青森市の囃子とリズムが違い、高く跳ねるのが特徴。

(パンフレットより)

【五能線「リゾートしらかみ」の絶景ポイント 千畳敷】



【商人や庶民のエネルギーの結集 五所川原の立佞武多 (たちねふた)】

